

## 感じていけるじやを 言葉にする勇氣



今わたしは『理解という名の愛がほしい。』という本を読んでいます。山田ズニーさんの本です。ちなみに、ズニーとは北インドのカシミール地方の言葉で「月」という意味だそうです。女性です。

毎日ちよつとずつ読んで、なるほどと思い、付箋を貼って読んでいるので、中々完読しません。今回はその中の「Lesson 7 表現者の味方」から少し引用してみたいと思います。

### ◆考えているけど言葉にできない

ズニーさんが書いているコラムの読者の高校生の先生がこんなメールをくださったそうです。

「考えているけど言葉にできない」という生徒もいます。でも、それは考えているのではなく、感じてはいるだけなのです。

感じていけるじやを言葉にするじやがわかるじや。ところが、彼女らが、感じていけるじやを言葉にするじやがないのは、言葉がなにかいらないのです。

「感じていけるじや」というのが彼、彼女らの根本思想です。

傷つかないようじや、傷つかないようじやと自分で自分を守るがためにじやとじや不自由ななな、かえて人を平気で傷つけたり、「コミュニケーションがとれません。結果、何一つ得るものがないのです。」

「コミュニケーションがとれない」

考えない  
「この悪循環の中で、子ども達もかきもせず、努力もせずただ「不快な思い」だけ募らせていきます。」

感じたことを、外に出すための勇氣、それが育つ場、それがないじやとよつと、じやとじや、やなとじや、ただただ、不快な気分となつて身体にたまつていくだけ。そう考えるじや、やるせない。

なるほどな、と思わせられる文章です。これは今の若者だけでなく、わたしや、皆さんにも、多かれ少なかれ思い当たることがあるのではないのでしょうか。

### ◆竹輪クラブで親も育つ

昨年からはじめた「竹輪クラブ」。子どもの育ちと共に親も育つていってほしい。自分が自分になるって、子どもだけのものじゃない。そんな気持ちからスタートした親育ちの時間です。

昨年度は徳島のトエックで受けた研修をもとに、「ヒールングレクリエーション」の手法で行ってきましたが、今年度はアドラー心理学の「勇氣つけプラクティカム」を基に行っています。

### ◆さまざまな見方考え方の存在を認める

「勇氣つけプラクティカム」第一回目は「様々な見方を、考え方の存在を認める」ということを、参加してくださった皆さんと焚火を囲んで行いました。

ご夫婦で参加された方がいらっしやつたのですが、面白かったのは、物の見方がまるで違っていたことがわかつたことです。

おひとりはお自分がどう思つかを判断に基準にし、もうおひとりの方は



へビの抜け殻みつけた

まわりの人にどう思われるかを大事にしていました。どちらがいいとか悪いとかということではありませんが、そんな風に夫婦であつても、いいえ、夫婦だからこそなのかもしれないが、感じ方が違っているのです。あの場で（勇氣をもって）それを話す機会があり、今までの謎が解けたようじや、お互いを理解するいい機会になつたようじやです。

### ◆自分特有のメガネ

人は誰でもオーダーメイドのメガネのような、自分特有のものを見方をもっています。そして、そのメガネを通して、体験や出来事を解釈して、判断や行動をします。たいていの人は、自分のメガネをまともだと思つていますが、まともとは思えないこともありま

### ◆自分の気持ちが言える場所

たけの子は、「子どもたちが自然の中で豊かに遊び活動し、人として大切な五感を磨き生きる力を育みその子らしく成長していくことを見守り、その子どもたちを取り巻く大人も子どもと共に成長することのできる地域社会の実現に寄与すること」を目的としています。（定款より）

6月20日は総会があり、ようやく資料もできあがつたところじや。11年目を迎えた今年度はどんな一年になるのでしょうか。

「コロナ禍の中、「新しい生活様式」が取りざたされていますが、その中に、自然や自分との付き合い方も入れてほしいなと思つています。たけの子は子どもだけでなく、大人もまた、自分の気持ちが言える場所にしていきます。

迎見 妙子